

自然と対話する

柴 田 有

1

五月連休の頃には、毎年決まってやることがある。キュウリの苗を土におろして、植えつける仕事。庭先の小さな畑であるから七、八本おろすだけである。大事な茎を折らないように、ポットから外して土におろす。支柱を立て、ハザを組み立てる。大して難しいことではないし、思い立てば苦にはならない。それに日を追って楽しみがふくらむ。梅雨時になれば次々と、強い黄色の花をつけるようになる。そこにクマバチが飛び回って、花の受粉を助けてくれる。そうなれば日ごとに実をつけるだろう。六月にはキュウリが食卓を飾るのだ。その味を今年も楽しみにしながら、期待がふくらむ。

これは信じていただけないだろうか。旬の時期には、キュウリがわが家の主食になる。三食のうち、一回はキュウリを抜くかどうかで口論になったこともある。毎日四、五本は取れるし、それ以上のことも珍しくない。一本一本がずっしり重く、トゲが手のひらに刺さるようなヤツである。食べると風味が感じられるのは、腐葉土と関係しているように思う。一例として朝食の献立（一食分）を紹介すると――

生のキュウリ一本（味噌を添える）
キュウリの糠漬け半本。カブ、ニンジンの糠漬け
胚芽米のご飯
味噌汁
インゲンの炒め物
アジの刺身

といった具合になる。

当然のことながら、畑仕事には自分の労働が入ってくる。少々辛い仕事も必要だ。労働抜きに野菜を手に入れる生活もあるけれど、そういう生活からは現場のことが、想像しにくい。たとえば畑の土の準備である。冬から春にかけて、土作りは単調な労働になる。ひとつ、台所の生ゴミを朝土に入れること。ふたつ、厳冬期にやる荒起こし。これは畑の土を鍬で起こし、ひっくり返して、寒気にさらすこと。害虫の卵を殺し、空気の気泡を含ませ、太陽の光線を射し込ませる。みつつ、植え付けの前になったら、畑に腐葉土を入れること。これは庭木の枝葉が原料である。習慣になってしまえば、こうした仕事も食前の二、三十分でできる。が、白い霜が降りているような朝は寒い。

五月の初旬にはたいてい植えつけが済んでいる。根が活着するまでの一、二週間、苗は弱々しく、外敵に襲われやすい。気温の急変や遅霜が心配だ。強風で根がぐらつかないかと、風の音が気になる。害虫に芽を摘まれぬかとか……、カミキリムシ、テントウムシ、ナメクジ、ヤトウムシなど強敵が揃っているのだ。こんな風に気遣いも多い。またモグラに根を切られることがあり、これは防戦の手立てが見つからない。それでもなんとか、危険な時期をくぐり抜けると、根が活着する。最初の双葉が黄ばんでくるので、それと分かる。お世話になりました、と挨拶されているような気がする。活着すれば、それから後は成長が目ざま

しい。その段階に入ったら、草取りをしたり、ワキ芽を欠いてやったりする。そうして成長を助ける。

梅雨になるとキュウリは活発に茎を伸ばし、ツルを絡ませながら支柱を上っていく。カッパの頭にのせたいような大きな葉が茂る。梅雨の晴れ間には、太陽の光が美しい。それが葉の表面でキラキラと反射する。葉緑体では光合成という現象が起こり、ブドウ糖など糖類が作られる。地表の植物全体では、一日にできる糖の量が天文学的な数字になる。結局のところそれが、地球上のあらゆる生命を支えているのだと言う。地表に住む人間も動植物も、海中の魚類もその食糧を、直接間接に植物から得ている。植物は太陽エネルギーを受けて光合成を行い、植物のからだを成長させる。また果実をつける。海水中の藻類もそれぞれの仕方で光合成を行っている。「草食系のヘタレ男」などと悪口を言う女子学生がいるが、そんな言葉を口にしてはいけない。牛とか豚とかだって皆、最終的には植物を食べて生きているのだから。石油も電気も使わずに、地球全体の食糧を生産するという偉大な労働が、太陽のエネルギーを利用して、植物の体内で行われている。人間の手では成しえない、労働の奇跡がそこで起こっている。それは、霊能者が一挙に引き起こすような奇跡ではない。太陽のリズムに従って、時間の経過を伴って実現する奇跡だ。

働き盛りの季節である。日ごとに開花と結実を繰り返し、クマバチの黒い体が花から花へと移ってゆく。人間の方も忙しい。この季節は、畝に追肥を施すことが大事である。「素人はネ、肥料が少ないんだヨ」と、農家のお婆ちゃんからよく言われる。草取りや害虫の駆除も怠るわけにはいかない。これは手仕事だから、日中は暑くてできない。では夕方は？蚊に制空権を取られる。

キュウリのツユは特有の甘味があり、香りもある。盛夏の時季、それを口に噛めば水分補給ともなる。ずい分美味しい水の摂り方だ。キュ

ウリの茎の先端は勢いよく伸び、三メートルの高さに達することもある。先端から十五センチぐらいのところでも、花をつけ、実がなる。そのツユは地面から吸い上げ、茎を伝ってのぼり、実の中に蓄えられる。電気も石油も使わずに汲み上げた水である。これもまた自然の労働によるのだ。それぞれの定めのもとで、キュウリはキュウリらしく生命の活動を続け、それがそのまま労働の成果を産んでいる。太陽のリズムに呼应しつつ、しかもキュウリの固有のリズムで労働する。キュウリの内発性を備えた時間がそこに流れている。キュウリ一本の水量はわずかかも知れぬが、キュウリの労働によるのである。とはいえ、畑の野菜全体で計算したならどうなるだろう。それどころか、地表の植物全体で考えれば、莫大なエネルギーとなるに違いない。しかも水の分子から成る水などではなく、美味しい水になっている。人間も動物もそれを食べて生きている。

人間が労働で語りかけ、自然も労働で応じる関係、自然との対話は労働がパイプになっている。そう考えてみたい。言語による会話ではなく、ましてや情報交換でもなく、労働による応答の関係である。都会の生活のなかではいたしかたないのだが、お金でキュウリを買う行為は労働の現場を見えなくしてしまう。金銭が労働をすり替え、人間の目から自然を遮蔽するからである。労働を通じて自然に語りかけ、自然の声を聞く対話の関係がそこで切れそうになる。自然界の労働の歌が聞こえなくなると、人間は自然に無理強いし、奴隷労働に追い立てるのではないか。

キュウリの表情を見ながら、そのか細い声に耳を傾けながら、野菜の世話をする。そのとき生き物と生き物の対話の関係が生まれる。労働を通じて生まれる対話である。盛期に入っているのに葉のツヤがない、と言えば、どうすればよいかを思案する。肥料が足りないのか、葉陰になって日当てが悪いのか、茎の芯に虫が入っているのか、迷いながら判

断することになる。その状況に適した対処ができるかどうか、やってみなければ分からない、という場合もしばしばである。一つの兆候が出たらこれが決め手、といったような単純な対応ではうまくいかないことが多い。一つの症状に対して一つの処方というタイプの、一対一の応答関係は現実には通用しないものだ。その時その状況でのベストは多様であって、一律に決めることはできない。しかし、対話を通じて見出すことはできる。これは対話的労働と呼べる。

労働のタイプ分けをするなら、これと対極をなす労働がある。奴隷的労働である。主人は奴隷に仕事をさせる時、対話などしない。否、強制的に働かせるのである。暴力によって強制することもあるだろう。生きのびるために、うめき声を漏らしながら強制に服従する労働である。そのように自然を強制し、酷使したとすればどうなるのか、どういう結果が生じるのだろうか。

18世紀の英国で興った産業革命は、近代化のうねりを世界の隅々にまで及ぼした。その大変動期に、蒸気機関の発明が一つの動因となった。よく知られている通りである。蒸気エンジンはもともと炭坑用の動力として用いられたが、短時日の内に様々な改良が加えられ、応用分野も広がった。こうして蒸気機関車（SL）の発明が鉱石や石炭の運送を容易にし、鉄鋼業の進展を促すと共に、工業都市の成立を可能にした。また19世紀の半ばには、駆動力に蒸気エンジンを装備した軍艦も出現する。黒船つまりペリー艦隊が苦心の末に遠洋を渡り、ついに日本の神奈川沖に姿を見せるようになった。

今日では日常用語となった「エンジン」の語がもともと何を意味していたのか、知る人は少ない。最近の英語辞典もこの意味を載せていないのが多い。私にしても、かつて或る物理学者から教えてもらったことなのだが、産業革命の時代に、エンジンは拷問の道具を意味した。拷問を加える側は暴力によって、相手に自白を強要する。自分の意思を一方

的に押し付けるのであって、対話など意図していない。エンジンはそのように自然を強制し、自然の秘密を自白させるための装置なのである。エンジンという名は強制労働の自然観を伝えている。「エンジン」の名を最初につけた人は、そのことを意識していたのであろうか。それは分からない。けれども蒸気機関の発明に先立って、そういう自然観は確かに名乗りを上げていた。西欧の哲学者たちは自然を強制するという考えを、すでに抱いていたのである。その思想を調べてみると、「エンジン」の語義と不思議に符合する。こんな言葉が残っている——、実験の技術を使って自然を苦しめるとき、自然はその正体を白状する (F. ベーコン)。科学者は自然を強要して自分の問いに答えさせねばならぬ (I. カント)。拷問にかけて秘密を白状させる、という新しい自然観を、17、8世紀の思想家たちは得意げに唱えていた。西欧型近世科学の、自然に対する「勝利宣言」とも受け取れよう。

黒船は蒸気エンジンによって水車型の車を回転させ、海水を掻き裂きながら航海した。海面の浮力や潤滑性を巧みに利用しながら、帆船とは比較にならぬほど航海の距離を伸ばし、時間を短縮する。つまり能率を上げることができる。経済のグローバル化が始まった頃の、市場経済制のもとの能率である。能率を上げるためには時間も空間も障害であって、それを乗り越えることが商売の目標なのである。潮の流れや風力の影響をもともせず、一定出力でエンジンは作動する。このように自然を従わせ利用する姿勢は、現代文明の至るところに見てとれる。ヨットはこれと逆である。風や潮の力を最大限活かして、目的地に向かう。自然の意向に聞き従い、やりとりしながら帆の向きや高さを考える。舵を操る。

「時間とは何か」、「空間とは何か」。現代文明に生きるわれわれはこの問いを忘れてはいしまいか。樹木の切り株に記されている年輪は何を語っているのであろうか。年輪を刻むことなしに、木は成長したのだら

うか。時間の経過は生命活動に不可欠の要因だと思う。都会の高層ビルに入ると、機能ばかりの図形的な空間が目に入ってくる。そういう時、何か死物の世界に飲み込まれそうな気がする。都会で働く人の多くは郊外の生活に憧れていると言うが、それは当然である。何かがおかしいのだ。もう一度素朴な気持ちに立ち返って、生命の時間、生命の空間を考えてみてはどうだろうか。日常の思考にとって、そんなことは面倒ダ、どうでもいいヨと言いたくなる。確かにそれは捉えがたきものだろう。だがそこから、自然と対話する科学が誕生するかもしれない。そこから、「緑の自然科学」が芽生えてくるかもしれない。だから愚直になることを恐れないで、自分の眼差しを自然に向けるのだ。青銅の蛇を見上げるようにして。

天体の運動は地上の自然界に反映している。地球の自転は昼夜の繰り返しを生み、また太陽の黄経上の位置は四季の律動をもたらす。四季の変化はまた、動植物の行動とも連動する。天体の時間と自然とは表裏一体をなしている。そういう時間の節目を日本語では、季節、時節、節分、二十四節気などと表現してきた。二十四節気は太陽の円軌道を15度ずつに分け、15度カケル24で360度になっている。二十四節気は農事暦とも結びつきが深い。二十四節気の一つは春分である。それは太陽の黄経が360度、すなわち零度の方位にあることを指している。太陽はそのとき、周期運動のスタート地点に立っているのである。われわれはその日をお彼岸と呼び、春の予兆を感じつつ、オハギを食べてその日を祝う。春分という言葉はまた、生物の活動の節目を指している。農作業や作物の成長にとっても大事な節目を刻んでいる。このようにして、天体の時間には節目が入る。しかも天体の運動は年々帰帰する。だから、繰り返しの現象である。つまり節目と繰り返しを持っている。そういう風にリズムをなしている。

畑の野菜は昼夜のリズムにしたがって活動している。日中は強い日

差しを浴びて光合成を行うが、夜間はおそらく休息しているのであろう。一日中単調に平均して働いているのではなさそうだ。植物の世界にはまた、春夏秋冬四季のリズムがある。それに伴って寒暖の差があり、乾湿の入れ替わりがある。冬野菜があり、夏野菜が食卓にのる。また春の新緑、秋の紅葉も年々繰り返しながら、自然界の律動を奏でている。太陽の運行のリズムが植物のリズムに投影され、そこに応答の関係が生まれている。太陽の進むステップに合わせて、地上の植物も歩みを運ぶ。形姿を変え、色彩を変え、丈が伸びてゆく。けれども植物の世界は多種多様であって、天体のリズムを一様に再現しているわけではない。植物はそれぞれ内発的なリズムによって太陽に応答している。だから太陽のリズムを一とするなら、それに対して、植物のリズムは多様なのである。

そういう「一」と「多」の関係が鮮明に表れる季節は、秋だろうと思う。樹木の種類にしたがって紅葉、黄葉の違いが生じる。それはどれほど多彩に照り映えることであろうか。ブナ、ヤマボウシ、コナラ、カエデ、サクラ、ヒメシヤラ、ケヤキ、イヌシデ……、それが深緑の常緑林とコントラストをなして、浮き彫りの縞模様に見える。山肌に織りなされる錦の衣は何のためでもなく、ただ美しく人を呼んでいる。箱根など各地で温泉旅行の楽しみともなるのである。紅葉は時間の位相をずらして樹木それぞれに変化していく。それぞれが自分のペースを守っている。木々は多様な旋律を奏でながら、太陽のリズムを映し出している。天体と自然の間の呼応、リズムの転移、すなわち類比がそこに認められる。「一」と「多」の関係に少し注意してみれば、そんなことが見えてくる。比例の図式にならってそれを表現すれば、[天体における太陽のリズム]は、[地上の自然における植物のリズム]と類比の関係を作っている。これを「類比」と言わずに、転移とか反映と言ってもよい。ただ、類比（アナログア）は哲学的な用語なのである。

活動にリズムがあるということは植物に限ったことではない。野鳥

の生活を見ても、季節に応じて生息の場を変える。毛色が変わり、食性
が変化し、鳴き方も変わっていく。湘南の山ろくでは、毎年三月頃にウ
グイスの初音が聴こえてくる。冬季には山間でチッチッと地鳴きをして
いたものが、この季節になると民家の近くまでやってくる。そしていか
にも頼りなさげにホーホケキョと発声する。しかしデビューの時期が過
ぎて初夏が近づくと、よく響く声で、谷渡りのさえずりも歌えるように
なる。毎年毎年、それを繰り返すのである。溪流に泳ぐイワナ、ヤマメ
は主として太陽のリズムに応答するようだ。しかし海の魚類にとっては
月のリズムの方が大きい。そうしたリズムを奪い去ったとしたら、どう
なるだろうか。動物も植物も衰弱し、やがて滅びる。人間とて同様であ
ろう。政治犯か思想犯か忘れたが、かつて囚人に対し、こういう拷問が
加えられた。独房に監禁し、四六時中こうこうと照明を当てたのだ。人
間から昼夜のリズムを奪ったその結果、ほどなく人間は破壊された。

今、リズムの転移という現象に目を留めてみる。リズムの転移はな
ぜ起こるのか、という問いをあえて問うのである。とりあえずはそれを、
人間の場合に置き換えてみる。と言うのも人間の魂（と身体）はリズム
が乗り移りやすいからである。その現象は古代から知られている。音楽
に合わせて手拍子を打ったり、足踏みをしたり、踊ったり。音声のリズ
ムはたちまち人の心にとりつき、とりこにする。そういう心理現象は今
日も日々経験するものである。呼応あるいは転移の現象がなぜ起こるの
であろうか。それはわれわれの魂（と身体）がリズムに対して感受性を
有しているからだ、と答えることができる。この例を参考にして、自然
のリズムを考えたいのだ。するとどういうことになるのか。例えばキュ
ウリは太陽の運行のリズムに対し、或る感受性を持っている、と言って
よいのではなかろうか。光合成を思い出せばそう考えたくなる。だが、
それだけでは何かが足りない。キュウリの芽、茎、葉、花、根と見てゆ
くと、地上の部位と地下の部位とに分けられるだろう。そこで今、地下

の根と土に目を向けてみよう。根は土から水分養分を吸収し、それが茎を通って上り、植物の体や果実となる。では、根や土もリズムを受け取っているのだろうか。

土壌学 (Pedology) と呼ばれる研究分野がある。土の科学である。これは農業や森林保全との関係もあるので、学問の歴史はかなり古い。しかし現在に至っても分からないことばかりだと言う。根はどのようにして養分を吸収するのか、基本的なことなのによく分からない。土に団粒 (だんりゅう) 構造が生まれるのはなぜか。それもよく分からない。すべてが複雑すぎて分からないのだ。だが、これまでに検証を経て確かめられた知識も、少なくはない。結核を経験した人ならご存知と思うが、ストレプトマイシンという薬がある。これは土壌の研究から生まれた特効薬で、その発見者は S. A. ワークスマンと言う。この人は土壌学者であって、彼の行った土の観察は多くの成果を生んだ。その一つは次の言葉に要約できる。土が本来の性格を備えた土であるならば、つまり、植物が育つような土であるならば、と彼は言う——、土は多彩な生物の世界であり、土を一種の生態系と見ることができる、と。ここで「生態系」という言葉に注目したい。大づかみに説明すればこういうことである。多種多様で無数の生物が、互いに助け合って、生命活動の空間を形成している。だから生態系という見方をすれば、植物の生命を、太陽光や土を含めて、多少全体的に捉えられる。

生態系の空間あるいは生命の場、それはどういう性質を有しているのか。生命の場を求めて歩んできた探求の道は、ここにつながっている。この問題こそ、われわれの探求目標なのである。この問いに対して、とりあえず言えることが一つある。生態系の空間を幾何学空間として想像してはならない、という点だ。われわれは普段直方体とか球体の空間イメージに頼って、特に意識することもなく生活している。「空間」という言葉を使うとき、チョコレートの入った箱とか、4LDK のマンション

とか、冷蔵庫の容積とか、LEDの電球とかを思い浮かべる。つまり輪郭が定まっており、定規やコンパスで作図することのできる空間である。これに対し、生圏は無数の生物がうごめき、誕生し死滅しながら、留まることもなく変容する場なのだ。そこに輪郭を見定めようとしても、無駄な努力となる。だから、これは普段われわれの抱く空間のイメージと全然異なる。舞台装置のような空間をまず設定し、そこで役者や踊り手が何かを演じる、という考え方は通用しない。

良好な畑の土を一つかみ、手のひらに取ったとする。すると、そこに何億何兆という微生物が生きており、活動していると言うのである。微生物の代表はバクテリアであり、また地中の小動物にはミミズ、ヤスデ、ダニ、ハサミムシなど大勢いるが、ミミズの知名度がナンバーワンである。ミミズは土をきれいにし、団粒構造を用意する。団粒構造とは、直径2～5ミリの土粒が隣り合わせに密集したものを言う。個々の団粒には細管が通っており、水や養分が蓄えられている。そこに作物の毛根が入り込んで養分を摂取する。だからミミズは農民の労働の見えざる協力者である。土の労働連鎖のリーダー格でもある。

では地中の養分は誰が用意したのか。それが、バクテリアと呼ばれる細菌の群集なのである。`バクテリア'という耳慣れない音声を初めて聞いたのは、中学時代の生物の授業だったように思う。あるいはもっと前だったのかも知れない。気にかかる響きではあったが、長い年月、その意味を調べてみようとは思わなかった。それが最近になって、ふとした機会から気持ちが変わった。もとはギリシャ語の単語である、と言うのだ。驚いたついでに、綴りを想像しつつ辞典を開けてみた。何とそこには、女性名詞としてこの語が挙がっていたのである。頻用される単語ではないらしいが、意味は歩行用の杖だという。その他に権能の徴としての杖ともある。顕微鏡で撮った写真を見ると、たしかにバクテリアは杖か棒といった形状をしている。と言っても杖の長さは2～3ミクロン、

つまり1ミリの千分の2～3という程度である。ただし、別の形状のバクテリアも存在し、たとえば球形の種類があるようだ。

バクテリアの群集は土の団粒の中に好んで棲みつく。微細な杖は魔法の杖である。地中の有機物を分解し、作物の根に養分を差し出すのはその一面である。ミミズや根が用意してくれた団粒の中で活動し、地中の養分を作物の根に差し出す。

こんなふうにして土の中では、きわめて複雑な連携を保ちつつ、生命の営みが続いている。その舞台に登場する役者はバクテリアやカビの群れであり、ミミズをはじめとする小動物たちであり、舞台装置としては鉱物性の団粒構造がある。そこに水、空気、腐植、太陽光が関わってくる。また農家の耕作も労働連鎖の一環である。だから土の生態系というが、それは無限に錯綜したネットワークになっている。その広がりには果てがなく、果てがないから輪郭もない。幾何学空間のイメージではとても捉えられない、生命の圏域なのである。

土の中に拡がる生命の場についてもうひとつ、容易に見て取れることがある。太陽のリズムに対する感受性を具えている。生ゴミを畑の土に混ぜ、毎日その様子を見てみると、寒暖の差によって消化の良し悪しが生じる。バクテリアが腐植中の有機物を分解する働きは、温度の影響を受けるからである。しかもそれはバクテリア単独の働きではなく、生態系全体の協力体制に助けられて可能となる働きであった。だから土の生態系は温度の影響を受ける。一方、地中の温度変化は太陽のリズムに応じて生じる。生命の場には、そういう感受性、あるいはリズムの類比という能力が潜在する。これも幾何学図形にはない性質である。

2

七月の声を聞くと、夏トビ漁の季節が始まる。夏の夕暮れ食事が済

む頃になって、漁船が出て行く。漁師たちはトビウオ漁に向かうのである。この漁は夜なされ、翌日旅館やら民宿やらで食卓に上る。美味であって、艶のある身が美しい。旬のトビは刺身やたたきに向いており、夏でも食欲が湧いてくる。そこに赤イカの刺身を添えれば、見映えも味も引き立つと言う。だが、伊豆諸島方面ではなんと言ってもクサヤだろう。トビウオは塩焼きにしても喜ばれるし、干物やかまぼこ材料としても高級品になる。だから市場の相場も悪くないらしい。地域経済にとっては大事な魚種である。トビウオは黒潮に洗われる島々や、太平洋の沿岸、それに日本海の一部で捕れる。この漁は秋まで続くが、年によってそれも変わる。

満天の星空の下に自分がいる。小さな漁船の甲板に立っていると、遠い昔、星座を頼りに航海したという話が親しく思われる。太陽や月の運動が四季を廻らせ、季節の潮の流れをもたらし、干満を定める。天体の配置が、潮という姿で海に映し出される。そして魚種は、潮の状況で決まる。魚種に応じて漁のやり方も変わってゆく。だから海的生活は、星辰の運行を映す鏡になっている。

夜闇を突き抜けて二、三十分走って行くと、最初の漁場に着く。船頭は遠くの島影や周囲の岩礁、他船の動向に気を配る。潮や風の流れを見計らう。海中の様子をじっと観察する。これでよしと見ればエンジンを空転状態にし、集魚灯のスイッチをひねる。家庭用の電球を十倍も大きくしたような巨大な電球が点灯して、海面をこうこうと照らす。水深は10メートルぐらいであろうか、白い砂地の海底だ。光を反射して明るく輝く。海中に空間が現れて、小宇宙が生まれたかのようなのである。だがトビウオの魚影は見えない。それでも漁師は潮の動きに目を凝らしている。しばし空白の時間が経ってゆく。それからふと、数匹のトビが急ぎ足で登場する。白い魚体が潮流を突っ切って行き、海中にひらめくという感じである。魚影は一瞬にして消え去り、もとの静けさが戻る。すると

次の瞬間様子が一変する。何百匹というトビの群れが明るい舞台に乱入し、乱舞し始めるのだ。

深い海中を一直線に走りぬく魚、海面すれすれにゆっくり泳ぐ魚、羽を伸ばして水面から飛び立つ魚。遠く飛ぶもの、2、3メートルで着水するもの、水面を滑走するもの、一回り旋回してから着水するもの、速く飛ぶもの、ゆっくり飛ぶもの、船べりに激突するもの、海面で浮遊するもの。トビウオの有りのままの姿である。トビウオという魚の生の営みが、ほんの一面そこに見えている。そういう生命の躍動を、言葉で描くことができるであろうか。その漁を通じて魚を水揚げし、生活の支えとする漁夫には、トビウオの姿がどう見えているのか。知る人ぞ知る、である。

トビウオは黒潮の流れの中で生きている。天体の運動に呼応して生活しているのである。魚の群れにはそういう命が宿っている。生きているとは、本来、自然の活動と共鳴する生活を言うのであろう。トビウオの生命現象はどのように成立しているのか、と言うなら、私は知らない。魚類図鑑や百科事典を調べても、なぜかそのことには触れていない。けれども不思議なことに、それが生きているということは判別できる。実感で分かるのである。身体の視覚で目に見えるということであり、実験装置を通して見えるのではない。でもそれは「生きているか、死んでいるか？」と問われて、「生きている」と答えるのとは違う。二者択一の問いかけに対してなら、無関心な態度でも答えられる。それは客観的と言うのかも知れない。でもそれとは違う。その種の感覚を言っているのではない。

絶え間ない潮の流れに揺られ、海中の色彩に目を奪われて、いつしか感覚の目覚めを経験する。感覚が研ぎ澄まされて、視界の奥行きが見えるようになる。それは多くの人が経験していると思う。風景の奥行き、一枚の絵が語るもの、或る言葉に潜む深い真実など。ある時突然見える

ようになる驚きの経験である。それまで感覚を遮蔽していた絶縁がそこで壊れる。その時自然の姿も違ったものに見えてくる。日常生活の中で視覚も聴覚も、今までバビロン捕囚の状態にあったのだ、という事にそこで気付く。それもそのはずだ。われわれの感覚は、都会の刺激に絶えずさらされ、疲労している。本来の働きが鈍くなっている。強い刺激に打たれ続けて受身に回され、やがて隷従してしまう。そういう麻痺した感覚を通して、支配の意思が人の心に忍び込む。ステレオ・タイプのものが見方が、われわれの意識に定着する。自分と応答する自然がこうして見えなくなる。街なかの生活は日々麻薬のように浸透してくる。テレビやジャーナリズムが絶え間なく毒矢を発信し、通信技術の発達は時間も空間もなきものにする。店頭に並ぶ食品が人々の味覚を狂わせる。光り輝く便利な生活が原発の存在を忘れさせる。感覚には、働きが正常なのか異常なのか、判別の基準が備わっていないのかも知れない。現代文明とそれに支えられた権力は鈍化した感覚を通じて、自己の支配を正当化してくる。だから感覚否定の思想は古代から今日まで、系譜を成して続いている。

海面を行き交う魚群や脈動する潮流や、夜空の星辰が「生きている」と語りかける。海の小宇宙が大宇宙と調和して生きており、自分もその生命に繋がっている事を直感する。魚を食べる時、私は食を通じて潮流とつながっているのであり、そこからまた天体の運動にも連なっている。そういう親和力の場に置かれて、トビウオの群れが「生きている」と見えるのである。思いつきかも知れぬ。しかしそういう考えがムダになるとも限らない。試みにそれを出発点にしてみたら、海の生命が少しは分かるかも知れないのだから。

トビウオは孵化してから集団生活を送り、潮の中で養分を摂る。動物性プランクトンや海水の養分である。潮にもまれて成長し、活動し、子孫を作り、老衰してゆく。その餌となるプランクトンに目を留めれば、

それはそれで他の生物を餌とし、太陽の光や空気や海水によって養われている。そこには食物の連鎖が成り立っているのであろう。トビウオは一定の年月そうした環境に生息し、身体の組織を形作る。日常われわれの目に見える魚体は、そのようにして出来たものである。そして魚体は或る種の空間によって構成されている。

明らかな事をわざわざ言うことになるが、魚は身体がなければ生きてゆけない。だとすればこういう事になるのであろうか。或る種の空間が魚の生命の一因を成している、と。

個々のトビウオを見れば、その体の細部に至るまで様々な空間になっている。骨、筋肉、内臓、血管、神経、浮き袋、目、歯、ヒレ、とくに羽の役割をする胸ビレ、魚皮、鱗。それに細胞レベルの組織。全てはそれぞれの空間によって構成されている。だからそれは物体でもあり、空間でもあるような「何か」なのである。別々に分けて考えることが許されないような、身体の空間である。これは考えにくい事かも知れない。普段われわれが空間を意識する時には、宇宙をスペースシャトルが飛んでいるような、何平米の床に家具を運び込むような、そんなイメージを描く。つまり日常意識の世界ではいつの間にか空間と物体が分かれてしまう。われわれは空間をそのような、幾何学空間の観念で捉えているし、そういう考え方が習性になっているようだ。

そればかりではない。トビウオの摂取する海水もプランクトンもまた空間である。トビウオは空間=物体であるプランクトンを食し、生き、やがては死滅して小宇宙に還る。生物的な小宇宙はどれを取っても空間性を有し、同時に物体性を具え、そこに生と死が宿っている。その環境は、太陽の光や空気や風、潮流、それにまた地形や岩礁の肌や海底の地質によって形成される。この小宇宙のどこにもアキ箱のような幾何学空間のイメージは当てはまらない。結局、物体性を具えていない空間は生物世界のどこにもない、という事になる。

そういう空間＝物体を何と呼べばよいのだろうか。「場」という呼び方もあるだろう。それでよいような気もする。だが、しばらくは保留とする。では「環境」ではどうだろうか。こちらは英仏などヨーロッパの言語に由来する。つまり翻訳語である。したがって、周囲を取り囲む世界、外界の意味で用いられ、生物環境などの言い方をする。とすると、生物自体や魚の身体を指して使うには少し無理があるのではないか。それから、これは飛躍した考えであろうか。錬金術師達の用いたウロボロスの図像がここで思い出される。ウロボロスは錬金術の実験過程を示すシンボルであって、自分で自分の尾を噛み、それによって養われる円環状の蛇を表している。蛇の輪の中には「一にして全（ヘン・カイ・パン）」と記されている。それは錬金術師の想像した物質の変成過程を意味する。このウロボロスの観念と比較できないだろうか。即答は難しい。無用の詮索とは言えないだろう。だからと言って、ここで深入りする気にもなれない。回り道になりかねないから、この点は将来にとっておきたい、としよう。

そこでどうするか、である。正直なところ、迷い続けるしかないと思う。チョット堅苦しい語感を与えるであろうが、この文脈で、あえて「生圏体」という造語を試みたい。この呼び方で言いたいのは、生命世界すなわち生圏を構成する、もっとも基本的な空間＝物体なのである。空間＝物体であって、生命を支える「何か」という内実をそこに込めたい。

とりあえずこの語を手立てにして考えてみよう。今まで見てきたことはこう言い換えられないだろうか——、トビウオも、その餌も、海の潮も、海底の砂地も、岩礁も……すべてはそれぞれの姿を持った生圏体であり、その全体を成す小宇宙もまた生圏体と呼ぶことができる。そして大小様々な形態の生圏体は相互に変容する。すなわちプランクトンなどの養分はトビウオの身体に変容する。また成魚が産卵すれば、卵という別の生圏体に変容するのである。そういう無数の変容が、つまり

生成消滅が、小さな宇宙の中で起こっている。しかもその総和として、トビウオの種は半永久的に存続する。生圏がひどく攪乱されなければ半永久的に存続し、季節の訪れとともに回帰し、元気な姿を見せてくれる。

トビウオの生命はどこから来るのであろうか。いや、そういう風に起源を問うことが、すでに先入観を含んでいるのかも知れない。むしろこう問うべきであらう。トビウオの生命はどのような有様で現出しているのであろうか。今、こう想像してみる。魚の活動する小宇宙が黒潮の帯全体に広がっている、と。その大きな潮流を一つの生態系に見立てて、考えを進めてみたいのである。生圏体やリズムの構想をそこでまとめてみたい。

トビウオは黒潮の流れのなかで生きている。トビウオだけではない。われわれの食卓をにぎわすカツオ、マグロ、ブリ、サバ、イワシ、アジ、サンマなども黒潮を生圏とする。「黒潮」という呼び方は、長大な流路をもつ一つの潮流を指している。フィリピン東方に端を發し、日本の南岸を北上して、三陸沖からさらに東進する。流れの始めと終わりはそれぞれまた別の海流に接続している。日本の主要な多獲魚はそこで生活しているのである。

では、その長大な生態系のなかで、その内部だけで命が生まれ、命を宿しているのだろうか。もしそうなら、黒潮の流域の内部に生命現象の一切が見られることになる。けれどもそれはおかしい。なぜなら潮流の波動から切り離して魚の生命を考えることはできないのだから。そして、潮の律動には天体の周期が反映しているからである。生圏体の小宇宙はリズムと共に生命を養っている。だから自足していない、自閉していない。先日、久しぶりに水族館に行った。近所の子供と二、三時間見学した。魚類やクラゲを間近から観察するのは面白い。パネルに書いてある説明も勉強になるし、充実した午後となったわけである。ただし海釣りをしてきた者の目で見ると、チョット気になることもあった。ガラ

ス張りの内部で泳ぐ魚は、大海で活動する魚と違う。しぶきを立てて群泳するソウダカツオや、全速力で小魚を追跡するワカシとは魚体の艶が違う。

黒潮の海水は温度が高い。表層の水温は夏に30℃、冬でも20℃近くまで上昇する日がある。さらに高濃度の塩分を含み、強い流勢を保って直進したり、蛇行したりする。

黒潮の強流はどのようにして生じるのか。それについてはこういうことらしい——、黒潮の流動は天体の運動によって生じる、と。つまり大地と同じように、海も天体の影響を映す鏡なのである。例えば太陽の日照が太平洋の全体に温度差をもたらす。広い範囲の海水の温度差が、あの潮流の一つの起動因となっている、と言う。しかも太陽の位置は季節を追って変わるから、潮況にもそれが反映し、初ガツオや秋のサンマが旬の味覚を多彩にする。黒潮の動因には、この他に太平洋の風系、月の満ち欠け、地球の自転なども挙げられる。

黒潮で生活する魚類はさまざまな行動様式をとり、それぞれ主たる生息域をもっている。そこで大づかみに見れば、黒潮の流域全体が一つの生圏になっていると考えてよい。フィリピン原産のチョウチョウオの種類がいる。それが黒潮に乗って伊豆諸島まで遠泳し採捕される、という報告が出ている。どうしてそれが分かるかといえば、このチョウチョウオは大きくならないのである。現物を見せてもらったことがある。モンシロチョウよりもずっと小さかったと思う。日本の近海に生息するチョウチョウオと、その点ではっきり区別できる。この例で分かるように、黒潮の広大な流域に渡って魚類の行動範囲が出来ている、と見てよいのではなかろうか。

(2015年10月3日 未完)